神奈川新聞　第3種郵便物認可

アート通じ支え合い

障害者の活動紹介

ラゾーナ川崎でシンポ

シンポジウム「アートを通じて考えるインクルージョン」が27日、川崎市幸区のラゾーナ川崎プラザソルで開かれた。文化芸術を通じてあらゆる人を包み込み、支え合う「インクルーシブ」な社会の実現に向け、障害者の創作活動などの先進例を紹介する講演やパネル討論が繰り広げられ、約110人が耳を傾けた。（菱倉　昌二）

地域で障害児・者とアート活動に取り組む人を招いて開かれたシンポジウム　＝ラゾーナ川崎プラザソル

基調講演では、田園調布学園大教授で、元県立麻生養護学校校長の鈴木文治さんが登壇。「障がいと芸術」と題し、麻生養護学校で全国初の芸術コースを設置した経験を語った。同コースの音楽（器楽）グループでは、バイオリニストの五嶋みどりさんらの協力を得て練習に取り組み、「弦の指を押す場所に色のシールを貼るなどして、障害を克服する手はずを整えれば演奏はできる」とした。また美術グループでは「作品を商品化して外に出していくことに大きな意義があった」と振り返り、「芸術コースは、発表を第三者に見てもらうことで向上心にもつながる」とした。

パネル討論では鈴木さんを座長に、studio FLAT（スタジオ・フラット）アートディレクターの大平暁さん、カナウェル代表理事の岩永浩一さん、障害者福祉サービス事業所しらはた（長尾福祉会）職員の天野有希子さんがパネリストを務めた。

大平さんは障害の有無にかかわらず作品制作や鑑賞を行う中で、「今後の目標は所属作家の自立」と語り、企業と障害者の作品を結びつける「エイブルアート」に県内で11人、うちFLATに4人の登録作家がいるとの実績を報告。

岩永さんは音楽プロデューサーとして活動する傍ら、障害児や健常児のためのダンスやミュージカルなどの「チャレンジ教室」を展開。「子どもたちの笑顔が一番うれしい。『また来てね』と言ってくれる子の目を見ると、活動をやっていて良かったと思う」

天野さんは施設利用者の余暇支援として創作活動を実施。支援者の課題や困り事などのアンケートを基に「創作的活動ガイドブック」を作成した。「作品を家に持ち帰ってもらうと、親御さんが『この子が頑張って作ったことが分かる』と喜んでくれることがうれしい」と話した。

シンポではまた、FLAT所属の山内健資さんによる作品トークも行われた。